国際学会報告

第５回土地利用交通モデルシンポジウム

5th Oregon Symposium on Integrating Land Use and Transport Models

小島　　浩*

By Hiroshi KOJIMA

１．はじめに

オレゴン州交通局では、1994年から土地利用交通モデルの開発を進めてきている。

このモデル開発に伴い、土地利用交通モデルに関わる各国の研究者が集う国際シンポジウムを、1998年から始め、2〜3年に１度のペースで開催している。本稿は、2008年６月に米国ポートランド市で行われた第５回シンポジウムの概要を報告する。

２．第５回シンポジウムの概要

第５回シンポジウムは2008年６月19日から20日の２日間、ポートランド州立大学で開催された。

シンポジウムでは、モデル開発業務に携わっている行政担当者、学識経験者などが百名程度参加し、活発な議論が行われた。

シンポジウムは、以下の４つのテーマに分けられて、主に北米及び欧州における取り組み事例が報告された。

①オレゴンモデルの改良について
②土地利用交通統合モデルの実用例
③地域経済モデルのチュートリアル
④地域経済モデルの実用例

３．知見

オレゴン州が開発を進めているモデルは、開発が始められて既に10年が経過するが、現在も改良・開発が続けられている。ポートランドを含めた広域行政体のメトロで開発されているモデルも、オレゴンモデルと同様に、10年以上の開発が続けられていることが報告されていた。

近年では、モデルの開発進捗に伴い、徐々に活用範囲が拡がってきており、議員や市民から、モデルへの要求が高まってきているという。特に、経済インパクト・コストに関わる要望が多くなっており、モデルへの経済評価の重要性が高まっているとのことである。本シンポジウムにおいても、経済的な側面へのアプローチ強化が大きな議題となっていた。

一方、モデル開発の課題として、物流・貨物車の予測や、土地供給・企業立地などに関わる土地利用の予測は、複雑な要因がからんでいるため、依然難しいことが報告されていた。解決に向けたひとつの考えとして、不確定な要素はそのまま不確定なものとして複数のシナリオを想定し、幅広い将来像を分析・整理することで、一定の傾向を読みとる方法が報告されていた。そのためにも、モデルの実行時間の短縮化が技術的な課題であるとしていた。

４．おわりに

今後我が国では、集約型都市構造に向けた都市政策・交通政策の検討・策定が求められ、益々土地利用交通モデルへの期待は高まると想定される。

今後も、実用化が進む海外モデルの動向に注視し、国内の計画に採り入れるべきものは、少しでも早く実務に適用できるよう調査研究を進めていきたい。

写真―1　LRT沿線に開発が進むポートランド

＊東北事務所